

2021年1月19日(火) 14:00-15:30

KURA「研究者の歩きかた」セミナーシリーズ #7: L-INSIGHT/KURA 連携プログラム

パブリッシングセミナー第1回「ジャーナルを立ち上げる」

主催：京都大学学術研究支援室(KURA) / 京都大学 L-INSIGHT 協力：紀要編集者ネットワーク

※本セミナーは第3回紀要編集者ネットワークセミナーを兼ねます

ディスカッション

金澤周作 (京都大学大学院文学研究科 教授)

小島基洋 (京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授)

山本和行 (天理大学総合教育研究センター 准教授)

設楽成美 (京都大学東南アジア地域研究研究所 助教)

仲野安紗 (京都大学次世代研究創成ユニット 特定准教授)

■創刊時の枠組みの設定と変化への対応

仲野：先生方からのご発表を通じて、創刊の時点から想定していた課題、そして休刊する時に改めて明らかになった課題が出てきました。そして最後に、設楽先生からある種の理想的な条件設定をご紹介いただきました。創刊当初から理想の状況をすべて取り揃えることはハードルが高いという印象を受けた次第なんですけれども、すべてを整えられないのだとしたらというところをまずお伺いしたいと思います。

金澤先生、『フェネストラ』を創刊された時に、設楽先生がご紹介されたような内容についてすべてご検討されたのかどうか、あるいは最初に何をすべきなのかという点についてお伺いできたらと思いますが、いかがでしょうか？

金澤：予算は基本的に無いという状況でこのオンラインジャーナルは作っています。私が紹介した『史林』は購読料を取ってやっていますし、設楽先生がご紹介くださった雑誌も予算措置があってこそそのいろいろだと思います。予算が無いという前提で始める時には諦めなければいけないことがいろいろありますが、オンラインジャーナルは小島先生がおっしゃったようにやろうと思えば無料でできるという利点はあるので、まずは発信ということなら全部をと考える必要はないのかなと私は思います。

仲野：山本先生は、休刊にあたって考えを深められたところもおありだったかなと思うんですが、いかがでしょうか？

山本：『南方文化』では、はじめに述べたように、40年以上継続してきた創刊時の枠組みをだんだん維持できなくなってきたところがありました。状況に応じて柔軟にやり方を、例えば途中でデジタル化なども進めていけば、いま問題になることはなかったと思います。柔軟に対応していくというのが非常に大事なかなというふうに思いました。

仲野：雑誌の役割、位置付けを最初に設定することが大事だというお話があったんですけども、運営体制であるとか編集の形態を変化に合わせていく、役割が変化したらやり方も変えていける状況づくりができているかどうかも肝になってくるということですね。

■経費の増大

仲野：質問がきていますので、いくつかご紹介できたらと思います。

設楽先生へのご質問です。「経費が増加ぎみとありますが、とくにどの経費が大きいですか」ということですが、いかがでしょうか？

設楽：創刊当初より費用が増えているという意味ですが、最近増えた経費としては、紙代の値上がりがありました。また、オンライン版では初めは PDF のみの提供でしたが、やはりアクセスを増やすには HTML 版の全文掲載が必要だろうということで、そうした対応も始めました。論文投稿数の増加に伴い、電子投稿システムを導入し、これにも費用が掛かるようになりました。（こちらは、研究所の予算で設置しましたが、利用料については現在、J-STAGE から援助を受けています。）他には、外国人編集委員への対応としてアクセス解析レポートの英文化作業などもあります。今後もいろいろ新しい取り組みをしたいと思うと、やはり経費が増えるのではと気になります。

■PDF化と著作権

仲野：続いて、山本先生に『南方文化』について質問させていただきます。「PDF化については著作権の問題はなかったのでしょうか」ということですが、いかがでしょうか？

山本：まだ PDF 化できていないので今後の課題なんですけど、これまでに検討していないので大きなハードルだろうなと思います。ですので、ちょっと進まない可能性というのもあるかなというふうに思っています。

仲野：金澤先生、設楽先生、小島先生のなかで、新たに PDF 化する場合の著作権について、対策であるとか考え方というのはございますでしょうか？

金澤：『史林』の話になりますが、バックナンバーをリポジトリ化した際には 1 年ぐらい、誌面にアナウンスを入れまして、掲載拒否の場合は連絡ください、なければ受け入れていただいと見做してリポジトリ化しますと告知しました。実質的にほぼ 100%リポジトリ化できました。そのひと手間はかならず必要だろうと思います。

設楽：雑誌の話ではありませんが、研究所のニューズレターの電子化に当たり、HP にて、一定期間を設けて、電子化とその公開にあたり何かある人は言ってくださいというメッセージを出しました。

山本：いまのお話だと、休刊している私どもの『南方文化』ではアナウンスの仕方が難しいなどは思いましたけれども、方法はあるのだなというふうに感じました。

■電子投稿システム

仲野：設楽先生に質問です。「電子投稿システムについてもう少しご教示いただけないでしょうか」ということです。

設楽：創刊当初は、委員間での議論をメーリングリスト上で、査読者とのやり取り（査読依頼やコメントの受付等）や著者とのやり取り（投稿論文の受付や結果の通知等）をメールベースで行ない、各原稿の進捗状況をエクセルで管理していました。電子投稿システムは、それをオンライン上で一括管理するシステムになります。やはり投稿数が増えてくるとこうしたシステムを使うと各原稿の現状が分かりやすく、また著者や査読者自身も状況を確認することができ便利だと思います。

■人材派遣制度の可能性

仲野：続いて、予算、人材不足という点について質問です。「他学部、他大学の院生さんやボスドクの方が、所属学部、大学を超えて人材不足のジャーナルの編集や構成に関わるといような人材派遣（ボランティア）のような制度は制度上可能だったりするのでしょうか」ということですが、いかがでしょうか？

金澤先生の研究室では院生を雇ったということですが、こうした開かれた制度についていかがでしょうか？

金澤：『フェネストラ』に関しては、研究室が発行主体なので、院生やオーバードクターの人などが手伝ってくれますし、制度上の縛りはないと思います。いま私たちがとくに求めているだけで、やろうと思えばできることだと思います。

仲野：小島先生はいまのところ経費はゼロで進めておられているということですが、もし役割の変化があれば新たな運営体制の課題が出てきそうだなという見通し、もしくはいま抱えている課題はございますか？

小島：実は最新号でも翻訳があったんですけど、翻訳を院生の人にやってもらいました。それに関しては、大学内部のシステムで助成金を使ったんですけど、他大学の院生となるとどういシステムか思いあたらないですね。

■課題と支援—英文化、人的リソース、海外発信—

仲野：今日のオーディエンスの方々にはいろいろな立場の方がいらっしゃいますので、雑誌の刊行を支援する立場の方も含まれていると思います。雑誌ないしは学会の課題に対して、さまざまな知識や情報、あるいはリソースが必要になってくるなかで、こういった

支援があると助かりますよというアイデア、もしくは直面している、直面するであろう課題がございましたら、先生方、順に教えていただけますでしょうか？

金澤：ほんとはできたらいいと思っているのは、今日も話しましたけれども、英文を載せることですが、いまの状況では本人が校閲料を払って仕上げたものを出してもらうしかないわけです。これを安価にできる手段があればいいなとすごく思います。

小島：我々も『MURAKAMI REVIEW』と横文字で名前をつけていますし、英語に開いていきたいという思いがあるんです。ただ、最近、英語の校閲システムはビジネス的にかなり洗練されてきて、安価にかんりのクオリティーでやってもらえるので、その課題は低くなってきているような気は個人的にはしております。

山本：僕は経費と人的なリソースの話をしたが、経費の面はいろいろな方法があると思うんですけども、編集に関わる人にどういうふうに積極的に関わってもらえるか、どういうふうに編集体制を維持するか、そこに人をどうやって当てるかというのが、非常に問題かなと思います。天理大学には国際系の大学院がございませんので、院生を使うこともできないので、そのあたりが課題かなというふうに思います。先ほどの派遣というのも、いい枠組みがあれば方法のひとつかなとは思いますが。

設楽：英文誌の場合には、国際的な発信力を高めるためのアイデアに関するアドバイスや、それに必要な具体的な手続きをサポート頂けると嬉しいです。アメリカなどでは大学図書館が出版にいろいろと関わっている例があると思いますが、図書館の方はやはり学術誌のデータベースに関する情報や知識をお持ちなので、こういった海外のデータベースに登録してゆくのが雑誌の評価を高めるうえで有効か、などアドバイスを頂きたいです。また、契約書を用意するにあたり、法律関係の英語は素人には難しく緊張しますので、相談をうけてもらえたりすると嬉しいです。

仲野：今日参加くださっているみなさまが実際にジャーナルを立ち上げようとする、支援が必要な場面に直面されることもあるかと思うんですけども、設楽先生がご発表されたような内容をサポートする仕組みはいまのところ京都大学には無いような状態です。ですけども、例えばこのセミナーと一緒に開催している学術研究支援室では、情報を集める、あるいは支援策を検討することについては引き続きご相談を受け付けていかれるのではないかなと思いますので、何かあればお問い合わせいただければと思います。本日はどうもありがとうございました。

付録1. 口頭では取り上げられなかったチャット上での質疑応答

■院生による編集作業

質問：金澤先生の発表への質問です。編集作業を院生が行っていましたが、ソフトウェアの操作の指導などはどうされたのでしょうか？

金澤：たまたま得意な院生がおり、その院生の主導で最初のテンプレートができました。特別な高額ソフトを使っているわけではありません。プロの編集者や出版社から見れば不足は多いのかもしれませんが、紙面の読みやすさは十分ではないかと思っています。どこまで求めるかによるのだと思います。

■英訳／英文校閲

質問：英訳についてですが、日本の歴史史料についても翻訳業者で問題ないのでしょうか？

小島：翻訳ではなく、少なくとも校閲であれば問題ないかと思っています。

付録2. セミナー後の議論の記録

■紙か、オンラインか

仲野：せっかくの機会ですので、一言、二言ございましたらお話できたらと思うんですけども。小島先生いかがですか？

小島：今回この機会をいただいて、自分がやっていることを客観的に考え直せました。そこで出てきた大きな疑問は、紙の雑誌は必要なのかなんですけど、どうでしょうか？ 設楽先生がおっしゃっていたネットがないという状況であれば別ですが。

設楽：そうですね、東南アジアにはネットにまだ繋がらないところがあるということで紙媒体を残したのですが、これは2011年、9年も前の議論ですので、アップデートしないといけないと思いつながら、どう調査したらよいか.....。

小島：そういう特殊な状況なら必要だとは思いますが、日本国内に限った場合にはどうでしょうか？

山本：いま学内の紀要の立ち上げをしていて、ちょうどそれが問題にはなっているんです。オンラインだけでやったときに、どうターゲットに対してリーチしていくのかが、学内で議論していても想像ができない。紙媒体だと図書館に送って、学会にも送って、研究者にも直接送ってという旧来のやり方があります。オンラインの場合はむしろ向こうから検索されるのを待つというところで、数多の雑誌に埋もれてしまうんじゃないかと懸念される方が多くて、そのあたりのハードルを越えられるという説得材料に欠ける感じではあるんです。

小島：その議論は私もよく聞くんですけど、個人的にはほとんど理解できないんです。紙の方が届くって感覚がもうないんですよ。

設楽：完全にオンラインにしてしまうと、雑誌といっても論文単位でしか見てもらえず、雑誌全体として見てもらえる機会が減るんじゃないか、と言われていたと思います。よく指摘されるのですが、雑誌全体をパラパラ見るときにおこるような思いがけない出会いがなくなってしまうのは、やはり残念です。

小島：そうですね。

設楽：ただ、どうなのでしょう。先生方のご発表をお聞きし、新しいことをいろいろ取り入れてきたつもりではありましたが、トラディショナルな形の雑誌を考えていたような気もします。今日、お話を聞いたオンラインジャーナルの在り方は、とても刺激的で持ち帰って考えたいと思いました。

山本：小島先生がここ十年ぐらい紙の雑誌をほとんど手にとっていないというのが個人的には衝撃的で、いまはそうなのかなあと。僕もまだ若いつもりではいたんですけど。もちろん CiNii など論文に直接アクセスはするんですが、紙の学術誌からの論文も相変わらず見ます。今の院生さんや若い研究者が本当にデジタル一本でっていうことになったら、オンラインにするべきかなと思うんですけども、まだそのへんの感触が得られていない感じですね。

金澤：雑誌として見るからこそ出会う文献はあると思うんですよ。キーワードを打ち込んだら、ネット上では好適なものが出てきますけど、それだと見落としてしまうものに出会えるのが、専門誌、学術誌の意義なのかなと思います。若い人たちはそういうこと自体が時間の無駄と思うかもしれません。そういう人たちが大勢を占めたら、紙の雑誌はなくなるかもしれません。ただ、違うものに出会う紙の雑誌の良さを表現できるインターフェイスを作れば、両方の価値を保ったまま紙を無くしていくことは可能かもしれないなと思います。

小島：それはシラバスでもあった議論で、僕は紙媒体のシラバスを残すのはそういう意味があるんだ、未知のものに出会えるじゃないか、だから残すべきだと思ったのですが、結局は紙媒体のシラバスは配布されなくなってしまいました。

金澤：ああ、でも紙媒体の頃のシラバスって真っ白だったから意味がないっていう……。

小島：確かに。最近はたくさん書いてあるんですけどね。

仲野：なぜジャーナルなのかは触れるべき話題だったかもしれないとっていて、というのは先生方のご発表で印象深かったのが、書くこと、文字の世界で戦っておられるからこそ、新しい媒体をコミュニケーションや発信のツールとするという、新しい発想でジャーナルを捉えていらっしゃると感じたんです。たくさんの発想が先生方にはおありなんじゃないかという印象を今日受けて、学内で制度、体制に対して何ができるのかを考える際にご相談できるといいのかなと思いました。既存のジャーナルだと思うから、紙なのかどうなのかっていう議論になってしまうのかもしれませんが、役割のところから入るとおそらくそこは特別重要なことではなくなっていくのかなと思ってお話を聞いていました。

山本：そういうふうに出された雑誌がどうしても周縁的なものに留まってしまう、金澤先生も最後のほうでおっしゃっていましたが、伝統的な雑誌があつての新しい雑誌というところがいまはあります。一方で、若手教員が業績を積まなきゃいけない、査読誌に出さなきゃいけないとか、大学で経費を削減しなきゃいけないとか、二次的な要因が非常に強くなっています。新しい試みとしてオンラインで雑誌を出すのはいいけれど、その労力に見合った位置付けを雑誌に与えられるか、役割果たせるかも課題かなと思います。これから金澤先生や小島先生が出されているような雑誌の展望はどういうふうになっていくのかなというのは、すごく興味深く感じました。

■編集に関わる意味

金澤：山本先生がおっしゃっていたように、オンラインジャーナルにせよ、なんにせよ、具体的にやっている人の熱量っていうか、ある種の犠牲が不可欠なのは、もうそれは仕方がないことだと思います。小島先生の『MURAKAMI REVIEW』にしても、もし小島先生がやれなくなったらどうなるのだろうかという気もしますし。そのへんのことを多くの方はあまり理解していないかもしれないですね。一昔前までなら勉強になるよと手弁当でやってもらっていたけれども、研究者のメンタリティが変わってきているので無理強いはできません。紙のものを読まないのも含めて、良かれ悪しかれ変化しているのは明らか……。

山本：そうですね、経験になるよって、こちらから無理強いするわけにはいなくなってきたと思いますね。ただそうなる、やったことのある人に編集の負担が集中してきます。僕はいま学会誌の編集担当を3つと学内の機関誌の立ち上げを2つと同時をやっているような状況で、それも経験があるからということで回ってきたものです。それぞれやる意味があると思って引き受けてはいるんですが、なんとかならないかとも思います。でも、それを誰かに渡すとなると、そこに関わって経験を積むことに意味、価値を見出してもらえるかというとなかなか難しく、そういうことを考える仕組みがなんとかできないかなというのは日々考えているところですね。いや、ちょっと難しい。

金澤：業績リストに書ける、または学振とかその種の申請の時にポイントになるとか、そういう噂が広がったら、たぶん一瞬にして.....。

■これからの展望—雑誌の認知、論文の良し悪しを学ぶ—

仲野：伝統的なジャーナルがあってこそという発言が度々あったんですけど、このあとの展望として、現時点での役割としては標榜されていませんが、例えば、いま学生さんが関わってくれている雑誌が、学術誌のヒエラルキーのどこかに正確に位置付けられるような未来は想像されていたりするんでしょうか？ ストーリーみたいなものかもしれないですけど。

金澤：そのような野望は明確にはしていませんけれど、私はできれば、ただのオンライン誌ではなく、ここに掲載したことがそれなりの意味を持つ雑誌としての認知を得たいと思っています。そのためには査読的な要素、なんでもいいから載せるのではない何かが必要だと思います。これは歴史学の世界、あるいは伝統的な昔ながらの学問分野特有の現象ですけど、雑誌にはヒエラルキーがあるんですよ。一方で、小島先生がおっしゃられたように、ネット社会はフラットで、検索で引っかかってきたなかで自分が関心のあるものを分け隔てなく摂取するってことはあり得るかもしれません。でも、歴史学であまり経験がない人がそういうやり方を取ると、良い論文と悪い論文の区別なしに使ってしまうということがあります。立派な結論だけれど実は全然論証できていないとか、そんなことはすでにあの人が言っているとか、そういうのがわからないのです。査読付きの良い雑誌に出ていたらそういうことはないという前提がありますから、そこで良し悪しを学んでから、ネットのフラットなものの恩恵を受けたらいいのではないかと思います。

仲野：時間がきましたということですけど、せっかくのご縁ですので、引き続き連絡を取り合えればと思っています。